

希望の花咲け

陸前高田「フラワーロード」

被災者ら100人植える

国道沿いの花壇にビオラの花を植える親子連れ。後ろは津波の被害を受けたホテル。3日午前、陸前高田市高田町曲松、安富良弘撮影



海にほど近く津波にのまれた陸前高田市の国道45号沿いの花壇に3日、地元の被災者らが色とりどりの花を植えた。来春に向け、かつての景色を取り戻し「未来への希望」につなげようとの思いを込めた。

国道45号沿いの歩道約1キロは、震災前まで「フラワーロード」として地元住民が18年間にわたり花を植えて続け、市民の憩いの場だった。津波で花は枯れ、がれ

きまみれになり、花壇もほとんどが壊れた。

今回、世界各国の庭園を手がけるオランダ人園芸家のジャクリン・ファン・デル・クルトトさんを招

き、花を植えることになった。集まった約100人は、がれきを積んだトラックが激しく行き交うなか、スコップで土をならした。ジャクリンさんに教わりながら赤やオレンジのビオラやパンジー3400株、チューリップとスイセンの球根1万株を植えていった。3月上旬からスイセン

が咲き始め、チューリップが咲く5月中旬まで楽しめる。

フラワーロードの活動を最初に始めた鈴木勝井さん(79)は「震災後に花壇を見て、もう諦めていた。花がまた植えられる感覚量です。この絆を大切にしたい」と話した。